シンポジウム「生命の資源化の現在」

開会挨拶

島薗 進

2007 年から、グローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」ということで、死生学という新たな領域に人文系を中心として取り組むということをしております。これは、医療と深い関係があることでありまして、終末期の患者さんのケアや、死別の悲しみ、つまりグリーフのケアなどということもかかわっておりますし、今回ここで取り上げますような、さまざまな生命倫理の問題というのもかかわっております。「象牙の塔」「書斎の学」というイメージの強い人文学でありますが、アクチャルなこの現代社会の問題に積極的に取り組んでいこうということで始めております。

このプログラムの 1 つの特徴は、若手研究者の育成ということにあります。とりわけ人文系では、博士課程の終わりから、さらにその後、PD といっておりますが、博士学位取得以後の若手研究者の育成ということが重要な課題になっておりまして、特任研究員という職名で十数名の若手の研究者に仕事をしてもらいながら研究を進めていただくということをしております。

今回のこのシンポジウムは、私どもが COE として取り組んでまいりました生命倫理問題の一つの応用問題を取り上げます。今回は、特に若手の研究者に企画を練っていただきまして、このテーマに関して現在望み得る最良のといいますか、大変有力な先生方に登壇いただきまして議論をしていただくということになりました。

昨年は、「脳死」「臓器移植」つまり命の終りの問題で大きく湧きましたけ

れども、私などは、粗雑なドタバタ劇であると思いました。しっかり議論すべきことを慌てて政治的に処理してしまったということを非常に残念に思っているわけです。

生殖補助医療、命の始まりの段階についても同じようなことが言えるかと思います。政府はなかなか本気でこういう問題に取り組んでおりませんし、国民の議論も十分に展開していない。しかし、現場では、こういう問題が毎日のように起こってきています。代理出産は今日の議論の中でも度々取り上げられることと思いますが、国境を超えて海外へ代理出産に行くというような人がどんどん増えている。国内でもそういうことを行う医師もおられるわけです。マスコミは、それを大変積極的に取り上げているわけです。しかし、国民的な合意というのには程遠い。あるいは、議論の深まりというのは一向に進んでいないということかと思います。

そういうことで、今日は、そういう問題に少しでも貢献できるような議論の深まりを目指しておりますので、どうぞ、最後までじっくりお聞きいただき、また、討議に参加していただければと存じます。若手の企画でございますので、いろいろ至らぬところもあるかと思いますが、どうぞそこのところはご容赦いただき、ご批評をちょうだいして今後の充実につなげてまいりたいと思います。

それでは、どうぞ、よろしくお願いいたします。

（しまぞの・すすむ　東京大学教授／宗教学）

シンポジウム「生命の資源化の現在」開催概要

開催日：2010 年 6 月 12 日
会　場：東京大学本郷キャンパス法文 2 号館　二番大教室
主　催：東京大学グローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」